

## 第1章

# 調査の概要

本調査の目的や調査の設計、県としての「学力」や「学力の伸び」の考え方についてのイメージを示しました。

また、これまでの分析から分かったことや、調査に関するQ&Aも掲載しています。

# 1 調査の概要

---

## (1) 調査の目的

本県の児童生徒の学力や学習に関する事項等を把握することで、教育施策や指導の工夫改善を図り、児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進する。

## (2) 調査の対象

県内市町村教育委員会、小・中学校及び義務教育学校並びに小・中学校及び義務教育学校に在籍する児童生徒。(教育委員会、小・中学校ともにさいたま市を除く)

### 【実施校数 (実施人数)】

- ・小学校 690校 (138, 647人)
- ・中学校 352校 (131, 985人)
- ・義務教育学校 2校 ( 342人)
- ・県立中学校 1校 ( 231人)

## (3) 調査の内容

### ○児童生徒に対する調査

#### ア 教科に関する調査

##### (ア) 対象学年及び対象教科

- 小学校第4学年から第6学年まで 国語、算数
- 中学校第1学年 国語、数学
- 中学校第2学年及び第3学年 国語、数学、英語
- 義務教育学校第4学年から第9学年まで

小・中学校の該当学年に準ずる

##### (イ) 出題範囲

学習指導要領に示された内容のうち調査する各学年の前学年までの内容

#### イ 質問調査

学習意欲、学習方法及び生活習慣等に関する事項

### ○学校及び市町村教育委員会に対する調査

学校における教育活動並びに学校及び市町村における教育条件の整備等に関する事項

#### (4) 調査実施日等

##### ○実施日

ア PBT（紙を使用した調査）26市町

令和5年5月8日（月）～5月17日（水）

イ CBT（タブレット端末等を使用した調査）36市町村

令和5年5月8日（月）～5月24日（水）

##### ○調査時間

ア 教科に関する調査は各教科1単位時間とする。

（小学校1教科40分、中学校1教科45分）

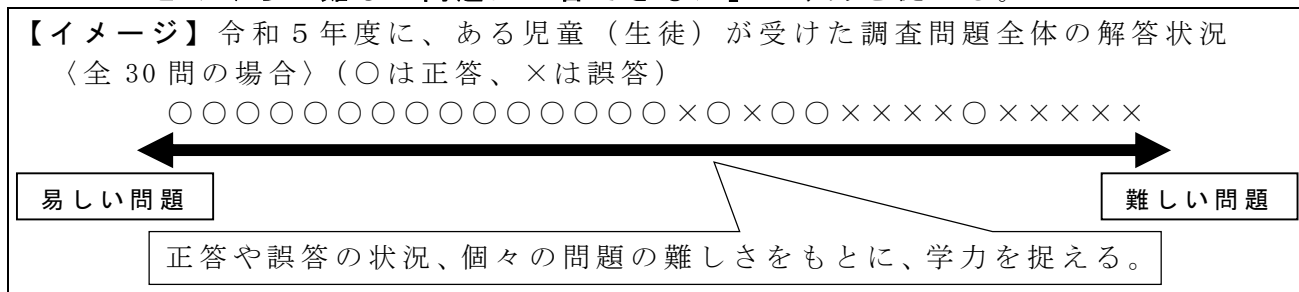
イ 質問調査は小学校、中学校とも20～30分程度とする。



## 2 学力の経年変化（伸び）を見る調査の設計

### (1) 本調査における学力の捉え方

「どのくらい難しい問題に正答できるか」で学力を捉える。



#### ア 学力の捉えについて

上の図のように、調査問題全体の中で難しい問題に正答し、易しい問題に誤答することもあるなど、児童生徒によって正答、誤答のパターンは様々である。そこで、どのような学力であれば、どのような解答パターンとなりやすいかということ、統計的手法を用いて推定し、その結果を学力として捉えている。

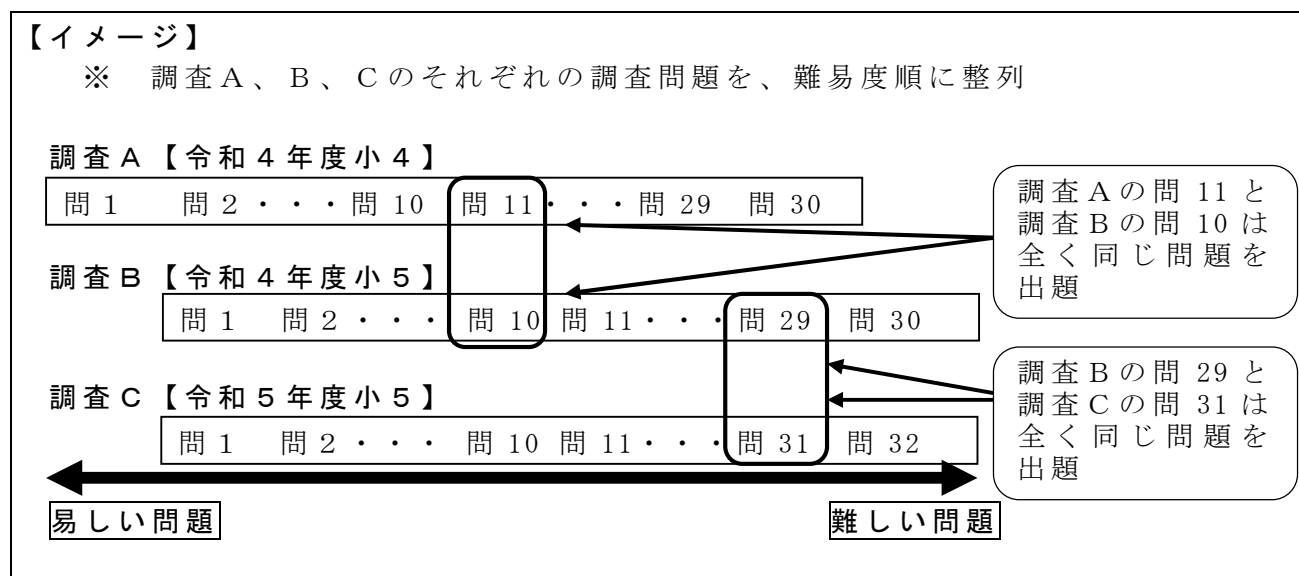
#### イ 「問題の難しさ」で学力を捉える理由

全国学力・学習状況調査など、正答数（正答率）を学力の指標として使う方式は「いくつの問題に正答したか」で学力を捉えている。この場合、単一の調査の中で学力を比べることはできるが、小学校4年生と5年生など出題内容が異なる調査の結果から学力を比較することは難しくなる。

「問題の難しさ」をもとに学力を捉える方式は、次の(2)に述べる工夫をし、異なる調査の問題の難しさを比較可能にした上で学力を捉える。

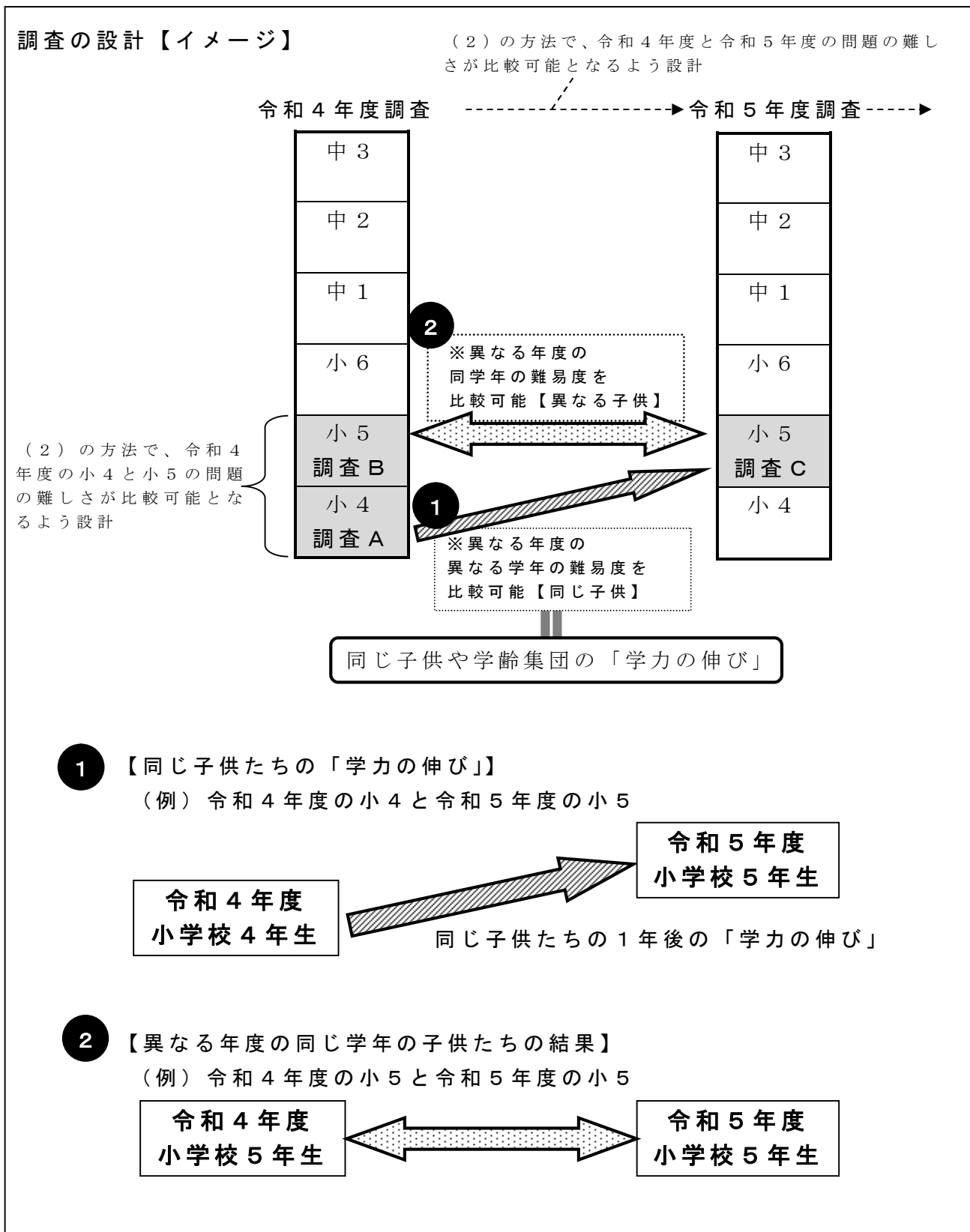
### (2) 年度や学年で、異なる内容の調査結果を比較するための工夫

それぞれの調査に「全く同じ問題」を一部出題し、その問題への正答や誤答の状況を手掛かりとして、すべての問題について「難しさ」を比較する。



(3) 埼玉県学力・学習状況調査の設計

(1)、(2)に基づき、本調査では、以下のような調査設計により問題の難しさを比較可能にして、それに応じて学力の経年変化(伸び)を見ることとしている。



(4) 本調査における「学力の伸び」の捉え方

ア 「難易度」について

本調査では、学力を「どのくらい難しい問題に正答できるか」で捉えるために、調査結果を分析し、全ての問題に難易度を設定している。

< 難易度の例 >

○ 例 1 計算問題 (割り算)

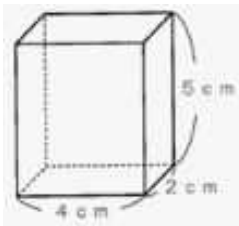
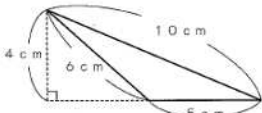
問題例	問題の難易度
$52 \div 4$	3
$5.6 \div 1.4$	4
$0.7 \div \frac{2}{3}$	6

整数同士の割り算である。  
結果を分析し、問題の難易度は「3」となる。

小数同士の割り算である。  
結果を分析し、問題の難易度は「4」となる。

小数と分数の割り算である。  
結果を分析し、問題の難易度は「6」となる。

○ 例 2 求積の問題

問題例	問題の難易度
<p>次の図のような、たて、横、高さがそれぞれ 2 cm、4 cm、5 cm の直方体の体積を求めましょう。</p> 	4
<p>次の図は、三角形の面積を求めるために、直線の長さを測って書き入れたものです。この三角形の面積を求めましょう。</p> 	6

与えられた数値全てを使って体積を求める問題である。  
結果を分析し、問題の難易度は「4」となる。

与えられた数値から必要な数値を取捨選択する問題である。  
結果を分析し、問題の難易度は「6」となる。

イ 「学力のレベル」について

様々な難易度の問題を出題し、それに対する正答や誤答の状況を見ることで、学力を判断している。

学力は、「学力のレベル」で表される。学力のレベルはレベル 1 からレベル 12 までであるが、各学年の測定は以下の表のように 7 レベルの間で行っている。

学年	学力のレベル	学年	学力のレベル
小学校 4 年生	レベル 1 ~ 7	中学校 1 年生	レベル 4 ~ 10
小学校 5 年生	レベル 2 ~ 8	中学校 2 年生	レベル 5 ~ 11
小学校 6 年生	レベル 3 ~ 9	中学校 3 年生	レベル 6 ~ 12

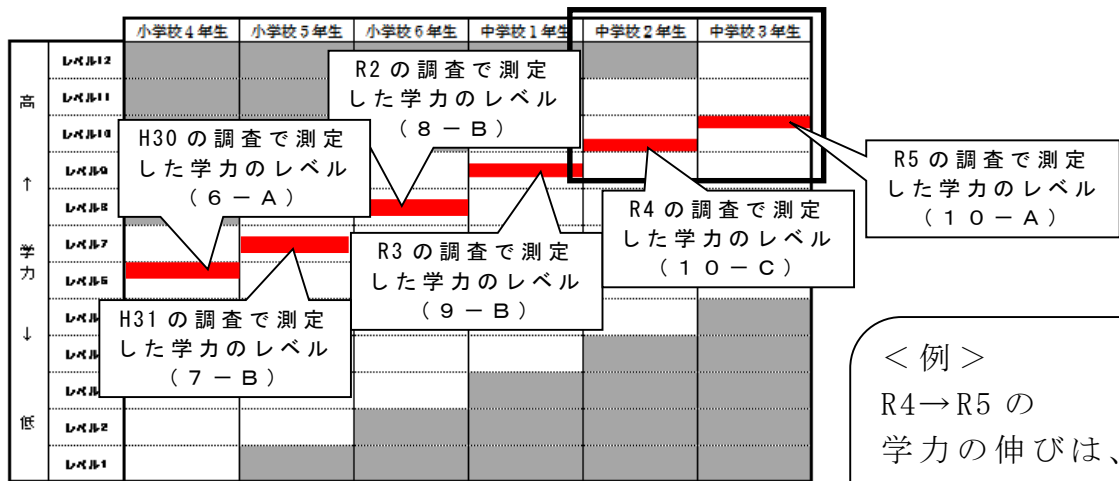
また、それぞれのレベルは、さらに細かく3層（高い順にA→B→C）に分かれており、同じレベルの中でもスモールステップで「学力の伸び」が分かるようになっている。児童生徒には、学力のレベルはこの小さな層で分けた1-Cから12-Aまでの36段階で提示される。

ウ 「学力の伸び」について

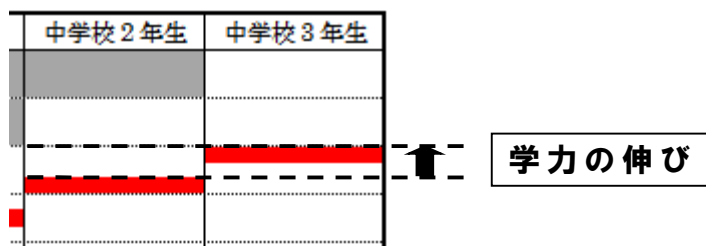
本調査では、年度間の学力のレベルの差を「学力の伸び」と捉えている。下図は、個人結果票の一部を拡大したものである。児童生徒には、学力のレベルがバーの位置で示される。前年度のバーの位置と、今年度のバーの位置を比べると「学力の伸び」が分かる。

「学力の伸び」は学力のレベルを36段階に分けた中でのレベルの差で測っている。

< 学力のレベルの示し方の例（個人結果票の一部） >



< 個人結果票・  部分を拡大したもの >



### 3 埼玉県学力・学習状況調査の分析から分かったこと(概要)

「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて、「学級経営」が、子供の「非認知能力」「学習方略」を向上させ、子供の学力向上につながる。



【①～④】 主体的・対話的で深い学びは、子供たちの「非認知能力」や「学習方略」の向上を通じて、学力を向上させる。

【⑤～⑦】 「学級経営」が、「主体的・対話的で深い学び」の実現や、子供たちの「非認知能力」「学習方略」の向上に重要である。

→ 「学級経営」がよいほど、「主体的・対話的で深い学び」が実現しやすい。  
「学級経営」がよいほど、「非認知能力」「学習方略」を伸ばす。

#### 平成28年度から令和元年度のデータ活用事業の分析から分かったこと

- ・「主体的・対話的で深い学び」の実施に加えて良い学級経営(落ち着いた学級づくり)が、学力や非認知能力を向上させ、子供の学力向上につながっている
- ・保護者や地域の方々が積極的に諸活動と関係している学校は、良い学級経営(落ち着いた学級づくり)を実現している傾向がある
- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現には、「授業に対する教員の意識変容」と「専門的な指導を受けながらの継続的授業改善」が重要である
- ・学力や学習方略が伸びた子供は教員との関係性が良い傾向がある
- ・毎年の子供たちの非認知能力を高めることが、学力の維持向上に重要である
- ・学級内における周囲との学力差は学力や非認知能力の変容に影響する

#### 非認知能力とは？

認知能力とは……いわゆる学力であり、たし算、漢字の読み書き、文章題、図形の把握などができる力  
非認知能力とは……認知能力ではない能力全般



#### 学習方略とは…学習の効果を高めるために子供が意図的に行う活動



【帳票40】を活用することで、

児童生徒一人一人の非認知能力や学習方略について分析することができます。

なお、平成28年度から令和元年度まで実施したデータ活用事業の分析結果等の詳細につきましては、ホームページを御覧ください。(https://www.pref.saitama.lg.jp/f2214/gakutyou/20150605.html)



## 4 調査に関するQ & A

---

### (1) 調査について

#### 【Q1】

従来の調査と県学力・学習状況調査とは何が違うのですか。

#### 【A1】

従来の調査は、学力を正答率で表すことが多く、調査年度の児童生徒の学力の現状を把握することには適していますが、実施年度が異なる調査の結果を比較しにくい課題があります。

そこで、県学力・学習状況調査では、異なる学年や年度間の問題の難易度を調整して学力を測定することにより、小学校4年生から、中学校3年生まで、児童生徒たちの学力が伸びていく様子をより明確に示すことができるようになっていきます。

#### 【Q2】

県学力・学習状況調査の調査問題は、原則として非公開とされていますが、なぜですか。

#### 【A2】

経年での伸びを測るために、同一の問題を年度を越えて出題する必要があることから、問題を原則非公開としています。

県学力・学習状況調査は、OECDの生徒の学習到達度調査(PISA)や、TOEIC、TOEFLなどと同様の分析手法を使っており、こうしたテストでも問題は原則非公開となっています。

なお、県学力・学習状況調査の類似問題等を基に作成した「復習シート」を県教育委員会ホームページに掲載しています。このシートは、家庭や学校で「学習した内容がしっかり身に付いているのか」の確認や、「一人一人の学力をさらに伸ばす」ことに活用できます。

(参考・県教育委員会ホームページ)

県学力・学習状況調査の「復習シート」について

<https://www.pref.saitama.lg.jp/f2214/gakutyous/images/fukusyuusi-to2.html>

## (2) 個人結果票の見方について

### 【Q3】

例えば、学力のレベル7で考えた場合、小学校4年生の学力のレベル7の児童と、中学1年生の学力のレベル7の生徒の学力は、同じと考えてよいのでしょうか。

### 【A3】

県学力・学習状況調査の「学力のレベル」については、学力のレベルが上がるほど難しい問題を解く力があると考えています。小学校4年生のレベル7と中学校1年生のレベル7では、正答できる問題の難易度は同じです。

ただし、小学校4年生の学力のレベル7の児童が中1のレベル7の問題を解けるかというと、解けない問題もあります。これは、学習指導要領により学習内容が定められているため、中学校1年生のレベル7の問題を小4の児童はまだ習っていないためです。

### 【Q4】

前年度からレベルの数値が1上がると、該当学年内でのレベル数値は低くても「大きな伸びが見られた」とコメントされていますが、なぜですか。

### 【A4】

本調査では、どの学力のレベルの中でも、数値が伸びているのであれば、児童生徒一人一人に伸びを実感させ、自信をもたせることが重要と考えています。

そのため、昨年度の自分と比較して、難易度が1レベルでも高い問題を解けるようになったことを「大きな伸び」と捉えてコメントしています。

### 【Q5】

例えば、中学校2年生での学力のレベルが5（中学校2年生の中では一番低い学力のレベル）の場合、学力のレベルが5より下のレベルがつけられない状態になっています。学力のレベルが5より下の場合は、どのように記載されますか。

### 【A5】

中学校2年生の調査において学力を測定できる問題の範囲は、レベル5からレベル11と設定しています。たとえ、問題に1問しか正解しなかったとしても、中学校2年生ではレベル5の学力がある可能性があるため、レベル5に位置付けられるようになります。この場合、レベル5を明らかに下回るのは、正答数が0問の場合であり、その場合は、レベル自体が記載されないこととしています。

### (3) 個人結果票の返却について

#### 【Q6】

個人結果票を児童生徒に返却する際、どんなことを伝えればよいですか。

#### 【A6】

本調査は、過去の自分の学力と現在の学力を比較できる設計となっています。一人一人の児童生徒に対して、学力の変化の状況についての適切な働きかけを行うことにより、今後の学力向上につなげていただきたいと思います。

①「今までの学力の変化」を確認し、学力が伸びた児童生徒に対しては、④「学習に関するアドバイス」を参考にしながら、1年間の頑張りを認めたり、ほめたりすることで、自信をもたせてください。また、学力が伸びていない児童生徒に対しては、教育相談などを行うことで、つまずきや悩み等を共有し、取組について丁寧な見取りなどを行うことで、今後の学力向上につなげてください。

児童生徒の解答状況については、②「教科の領域別正答率」の数値や、③「県平均と比べて時間をかけた問題」(C B T実施校のみ)を参考にしてください。これにより、児童生徒が解答に困った、迷ったと考えられる問題を抽出し、その類似問題の復習を促すことができます。また、「領域別のかけた時間」では児童生徒が時間をかけた領域を把握することができるため、個々の課題を可視化することができます。調査問題については、本調査の設計上非公表となっていますが、県ホームページ上に「問題概要」や「復習シート」(類似問題)を掲載しているので、それらも活用してください。

返却する際、保護者も同席している場合には、可能な限り時間をかけていただき、児童生徒の「学力の伸び」やよさや課題を丁寧に伝えてください。そのうえで、伸びたところをほめたり、認めたりするとともに、苦手領域を中心に家庭学習を充実するよう伝えるようにしてください。

①今までの学力の変化

②教科の領域別正答率

③県平均と比べて時間をかけた問題 (C B T実施校)

④学習に関するアドバイス

#### (4) 結果帳票について

##### 【Q7】

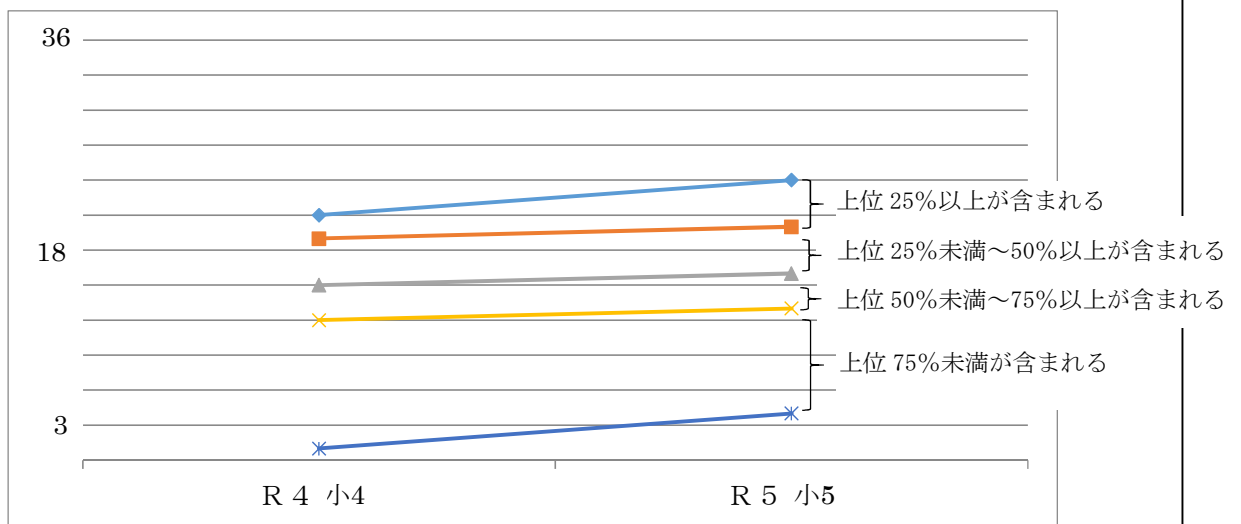
帳票の「28\_各実施主体の調査結果票」の見方についてです。  
線の傾きは何を表していますか。

##### 【A7】

この帳票では、同学年の集団の中で、特定の位置にいる児童生徒（75%値に位置する児童生徒、中央値に位置する児童生徒、25%値に位置する児童生徒）の前年度と今年度の学力を示しています。5つの点は個人を表すので、集団の変化として捉えるためには、点どうしの幅に着目することが大切です。

前年度のそれぞれの位置を、今年度と比べることによって、この集団の学力分布の変化が分かります。

##### 【グラフの見方】



- ◆ ⇒ 最大値(最も学力が高い児童・生徒が属する学力レベル)
- ⇒ 75%値(学力の高い順に並べたときに、上から数えて25%にあたる児童・生徒が属する学力レベル)
- ▲ ⇒ 中央値(学力の高い順に並べたときに、上から数えて50%にあたる児童・生徒が属する学力レベル)
- × ⇒ 25%値(学力の高い順に並べたときに、上から数えて75%にあたる児童・生徒が属する学力レベル)
- ※ ⇒ 最小値(最も学力が低い児童・生徒が属する学力レベル)

グラフの縦軸は、学力レベルを表しています。

目盛りは、個人結果票の学力レベル（12段階）を表しています。

各レベルの間は、A、B、Cの3段階に分かれています。

よって、全体では36段階（12×3）になります。

